

將軍

芥川龍之介

青空文庫

一 白襷隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だった。第×師団第×聯隊しろだすきたいの白襷隊は、松樹山しょうじゆざんの補備砲台ほびほうだいを奪取するために、九くじゆ十三高地うさんこうちの北麓ほくろくを出発した。

路は山陰みやまかげに沿うていたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だった。その草もない薄闇うすやみの路に、銃身を並べた一隊の兵が、白襷しろだすきばかりほのめ灰かせながら、静かに靴くつを鳴らして行くのは、悲壮な光景に違いなかった。現に指揮官のM大尉などは、この隊の先頭に立った時から、別人のように口数くちかずの少い、沈んだ

顔かおいろ色いろをしているのだった。が、兵は皆思いのほか、平生の元氣を失わなかつた。それは一つには日本魂やまとだましいの力、二つには酒の力だった。

しばらく行進を続けた後のち、隊は石の多い山陰やまかげから、風当りの強い河原かわらへ出た。

「おい、後うしろを見ろ。」

紙屋たぐちだつたと云う田口一等卒いっとうそつは、同じ中隊から選抜された、これは大工だいくだつたと云う、堀尾ほりお一等卒に話しかけた。

「みんなこつちへ敬礼しているぜ。」

堀尾一等卒は振り返つた。なるほどそう云われて見ると、黒くろぐ々と盛り上もつた高地の上には、聯隊長始め何人かの将校たちが、

合買うのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」

田口一等卒は口を噤つぶんだ。それは酒気さえ帯びていれば、皮肉な事ばかり並べたがる、相手の癖なに慣なれているからだつた。しかし堀尾一等卒は、執しつ拗ようにまだ話し続けた。

「それは敬礼で買うとは云わねえ。やれ×××××とか、やれ×××××だとか、いろんな勿もつ体たいをつけやがるだろう。だがそんな事は嘘うそつ八ぱちだ。なあ、兄弟。そうじゃねえか？」

堀尾一等卒にこう云われたのは、これも同じ中隊にいた、小学校の教師きょうしだつたと云う、おとなしい江木えぎ上等じょうとう兵へいだつた。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどう云う訣わけか、急に噛かみつきそうな権幕けんまくを見せた。そうして酒臭い相手の顔へ、悪辣あくらつ

な返答を抛りつけた。

「莫迦野郎！ おれたちは死ぬのが役目じゃないか？」

その時もう白襷隊は、河原の向うへ上つていた。そこには泥を塗り固めた、支那人の民家が七八軒、ひっそりと暁を迎えている、

——その家々の屋根の上には、石油色に襞をなぞつた、寒い茶褐

色の松樹山が、目の前に迫つて見えるのだった。隊はこの村

を離れると、四列側面の隊形を解いた。のみならずいずれも武装

したまま、幾条かの交通路に腹這いながら、じりじり敵前へ向う

事になった。

勿論江木上等兵も、その中に四つ這いを続けて行つた。「酒

保の酒を一合買うのでも、敬礼だけでは売りはしめえ。」——そ

かりでもない。各師団から選抜された、二千人余りの白襷隊しろだすきたいは、その大なる×××にも、厭いやでも死ななければならぬのだつた。……

「来た。来た。お前はどこの聯隊れんたいだ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊はいつか松樹山の麓ふもとの、集合地へ着いているのだつた。そこにはもうカアキイ服に、古めかしい襷たすきをあやどつた、各師団の兵が集まっている、——彼に声をかけたのも、そう云う連中の一人だつた。その兵は石に腰をかけたがら、うっすり流れ出した朝日の光に、片頬ひきほの面砲にきびをつぶしていた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顔をしたまま、何ともその冗談じようだんに答えなかつた。

何時間かの後のち、この歩兵陣地の上には、もう彼ひがの砲弾が、凄すさまじい唸りうなを飛ばせていた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯りかとんの我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙つちけむりを揚げた。その土煙の舞あがい上る合間あいまに、薄紫の光が迸ほどばしるのも、昼だけに、一層悲壮だった。しかし二千人の白襪隊しろだすきたいは、こう云う砲撃の中に機きを待ちながら、やはり平生の元気を失わなかつた。また恐怖に挫ひしがれないためには、出来るだけ陽気に振舞ふるまうほか、仕様のない事も事実だった。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子ひょうしに長い叫び声こゑが、もう一度頭上の空気を裂さいた。彼は思わず首を縮ちぢめながら、砂埃すなほこりの立つのを避けるためか、手巾ハンカチに鼻を掩おおっていた、田口一等卒たぐちに声をかけた。

「今のは二十八珊にじゅうはつサンチだぜ。」

田口一等卒は笑って見せた。そうして相手が気のつかないように、そつとポケットへ手巾ハンカチをおさめた。それは彼が出征する時、馴染なじみの芸者に貰って来た、縁ふちに繡ぬいのある手巾ハンカチだった。

「音が違うな、二十八珊サンチは。——」

田口一等卒はこう云うと、狼狽ろうばいしたように姿勢を正した。同時に大勢おおぜいの兵たちも、声のない号令ごうれいでもかかったように、次

から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN將軍が、何人かの幕僚ばくりようを従えながら、厳然と歩いて来たからだった。

「こら、騒いではいかん。騒ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、やや錆さびのある声を伝えた。

「こう云う狭隘きようあいな所だから、敬礼も何もせなくとも好よい。お前達は何聯隊の白襪隊しろだすきたいじゃ？」

田口一等卒は將軍の眼が、彼の顔へじつと注がれるのを感じた。その眼はほとんど処女のように、彼をはにかませるのに足るものだった。

「はい。歩兵第×聯隊であります。」

「そうか。大元氣おおげんきにやってくれ。」

將軍は彼の手を握った。それから堀尾ほりお一等卒へ、じろりとその眼を転ずると、やはり右手をさし伸のべながら、もう一度同じ事を繰くりかえ返した。

「お前も大元氣にやってくれ。」

こう云われた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化こうかしたように、直立不動の姿勢になった。幅の広い肩、大きな手、頬ほお骨ほねの高いあか赭あから顔。——そう云う彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝國軍人の模範もはんらしい、好印象を与えた容子ようすだった。將軍はそこに立ち止まったまま、熱心になお話し続けた。

「今打っている砲台があるな。今夜お前たちはあの砲台を、こつ

ちの物にしてしまふのじや。そうすると予備隊は、お前たちの行った跡あとから、あの界隈かいわいの砲台をみんな手に入れてしまふのじや。何でも一いっぺん遍べんにあの砲台へ、飛びつく心にならなければいかん。

——
そう云う内に將軍の声には、いつか多少戯曲的な、感激の調子
がはいって来た。

「好よいか？ 決して途中に立ち止まって、射撃などをするじやないぞ。五尺の体を砲弾だと思つて、いきなりあれへ飛びこむのじや、頼んだぞ。どうか、しっかりやつてくれ。」

將軍は「しつかり」の意味を伝えるように、堀尾一等卒の手を握つた。そうしてそこを通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。——」

堀尾一等卒は狡猾こうかつそうに、將軍の跡あとを見送りながら、田口一等卒へ目交めくばせをした。

「え、おい。あんな爺じいさんに手を握られたのじゃ。」

田口一等卒は苦笑くしやうした。それを見るとどう云う訣わけか、堀尾一等卒の心うちの中には、何かに濟まない気が起つた。と同時に相手の苦笑が、面憎つらにくいような心もちにもなつた。そこへ江木上等兵えぎが、突然横合よこあひいから声をかけた。

「どうだい、握手で××××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人真似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはいられなかつた。

「××れると思うから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思っている。」

江木上等兵がこう云うと、田口一等卒も口を出した。

「そうだ。みんな御国のために捨てる命だ。」

「おれは何のためだか知らないが、ただ捨ててやるつもりなのだ。

××××××××でも向けられて見る。何でも持つて行けと云う気になるだろう。」

江木上等兵の眉まゆの間あいだには、薄暗い興奮が動いていた。

「ちようどあんな心もちだ。強盗は金さえ巻き上げれば、×××

××××云いはしまい。が、おれたちはどっちみち道死ぬのだ。××

××××××××××××××××××××××××たのだ。どうせ死なず

にすまないのなら、綺麗きれいに×××やつた方が好いじゃないか？」

こう云う言葉を聞いている内に、まだ酒気が消えていない、堀尾一等卒の眼の中には、この温厚おんこうな戦友に対する、侮蔑ぶべつの光が加わつて来た。「何だ、命を捨てるくらい？」——彼は内心そう思いながら、うつとり空へ眼をあげた。そうして今夜は人後に落ちず、將軍の握手に報いるため、肉弾にくだんになろうと決心した。……

その夜よの八時何分か過ぎ、手擲弾しゅてきだんに中あたつた江木上等兵は、全身くろこげ黒焦くろこげになつたまま、松樹山しょうじゆざんの山腹やまはらに倒れていた。そこへ

白しろだすき襷たすきの兵が一人、何か切れ切れに叫びながら、鉄条網てつじようもうの中を走つて来た。彼は戦友の屍骸しかいを見ると、その胸に片足かけるが早いか、突然大声に笑い出した。大声に、——實際その哄こうしよ

笑^うの聲は、烈しい敵味方の銃火の中に、気味の悪い反響を喚^よび起した。

「万歳！ 日^{にっ}本^{ぽん}万歳！ 悪魔降伏。怨^{おん}敵^{てき}退^{たい}散^{さん}。第×聯隊万歳！ 万歳！ 万々歳！」

彼は片手に銃を振り振り、彼の目の前に闇を破った、手擲弾の爆発にも頓^{とん}着^{ちやく}せず、続けざまにこう絶叫していた。その光に透^すかして見れば、これは頭部銃創のために、突撃の最^{さい}中^{ちゆう}発狂したらしい、堀尾一等卒その人だった。

二 間^{かん}牒^{ちよう}

明治三十八年三月五日の午前、当時ぜんし全勝集しょうしゅうに駐屯ちゅうとんしていた、A騎兵旅団きへいりよだんの参謀は、薄暗い司令部の一室に、二人の支那人を取り調べて居た。彼等は間かんちよう牒てつの嫌疑けんぎのため、臨時この旅団に加わっていた、第×聯隊の歩哨ほしやうの一人に、今し方捉えとらられて来たのだった。

この棟むねの低い支那家しないえの中には、勿論今日も坎かんの火かつ気きが、快こころよい温あたたかみを漂なわせていた。が、物悲しい戦争の空気は、敷しきが瓦わらに触ふれる拍車の音にも、卓たくの上に脱だいだ外がい套とうの色いろにも、至いたる所ところに窺うかがわれるのであつた。殊ととに紅唐紙べにとうしの聯れんを貼はつた、埃ほこり臭におい白壁しろかべの上に、束髪そくはつに結ゆつた芸者の写真が、ちやんと鋏びやうで止めてあるのは、滑稽でもあれば悲惨でもあつた。

そこには旅団参謀のほかにも、副官が一人、通訳が一人、二人の支那人を囲かこんでいた。支那人は通訳の質問通り、何でも明めいりよ瞭うに返事をした。のみならずやや年嵩としかさらしい、顔に短い髻ひげのある男は、通訳がまだ尋ねない事さえ、進んで説明する風があった。が、その答弁は参謀の心に、明瞭ならば明瞭なだけ、一層彼等を間牒かんたつにしたい、反感に似たものを与えるらしかった。

「おい歩兵ほへい！」

旅団参謀は鼻声に、この支那人を捉とらえて来た、戸口にゐる歩哨しやうを喚よびかけた。歩兵、——それは白襷しろだすき隊たいに加わっていた、田た口ぐち一等卒とうそつにほかならなかつた。——彼は戸の卍まんじ字格子ごうしを後に、芸者の写真へ目をやっていたが、参謀の声に驚かされると、思い

切り大きい答をした。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴つかまえたのは？　掴つかまえた時どんなだつたか？」

人の好いい田口一等卒は、朗読的にしやべり出した。

「私わたくしが歩ほし哨しょうに立たつていたのは、この村の土堀どべいの北端、奉天ほうてんに通かいどううする街道であります。その支那人は二人とも、奉天の方向から歩いて来ました。すると木の上の中隊長が、——」

「何、木の上の中隊長？」

参謀はちよいと目蓋まぶたを挙げた。

「はい。中隊長は展望てんぼうのため、木の上に登のぼつていられたのであ

ります。——その中隊長が木の上から、掴つかまえろと私に命令されました。」

「ところが私が捉とらえようとする、そちらの男が、——はい。その髯ひげのない男であります。その男が急に逃げようと思いました。……」

「それだけか？」

「はい。それだけであります。」

「よし。」

旅団参謀は血肥ちぶとりの顔に、多少の失望を浮べたまま、通訳に質問の意を伝えた。通訳は退屈たいくつを露あらわさないため、わざと声に力を入れた。

「間牒でなければ何故逃げたか？」

「それは逃げるのが当然です。何しろいきなり日本兵が、躍りかかつてきたのですから。」

もう一人の支那人、——鴉片の中毒に罹っているらしい、鉛色の皮膚をした男は、少しも怯まずに返答した。

「しかしお前たちが通つて来たのは、今にも戦場になる街道じゃないか？ 良民ならば用もないのに、——」

支那語の出来る副官は、血色の悪い支那人の顔へ、ちらりと意地の悪い眼を送った。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私たちは新民主屯へ、紙幣を取り換えに出かけて来たのです。御覧下さい。こ

ここに紙幣もあります。」

髯ひげのある男は平然と、将校たちの顔を眺め廻した。参謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいだのが、内心好いい気味に思われたのだ。……

「紙幣を取り換える？ 命がけでか？」

副官は負まけおし惜みの冷笑を洩らした。

「とにかく裸にして見よう。」

参謀の言葉が通訳されると、彼等はやはり悪びれずに、早速あ裸かはだかになつて見せた。

「まだ腹はらまき巻をしているじゃないか？ それをこつちへとつて見せろ。」

通訳が腹巻を受けとる時、その白木綿しろもめんに体温のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹巻の中には三寸ばかりの、太い針がはいつていた。旅団参謀は窓明りに、何度もその針をしらべて見た。が、それも平たい頭に、梅花ばいかの模様がついているほか、何も変わった所はなかった。

「何か、これは？」

わたくしは「私は鍼医はりいです。」

髯のある男はためらわずに、悠然と参謀の問に答えた。

「次手ついでに靴くつも脱ぬいで見ろ。」

彼等はほとんど無表情に、隠すべき所も隠そうとせず、検査の結果を眺めていた。が、ズボンや上着は勿論、靴や靴下を調べて

見ても、証拠になる品は見当らなかつた。この上は靴を壊こわして見るよりほかはない。——そう思つた副官は、参謀にその旨を話そうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕ばくり僚ようや、旅団長などがはいつて来た。將軍は副官や軍参謀と、ちようど何かの打ち合せのため、旅団長を尋ねて来ていたのだった。「露探ろたんか？」

將軍はこう尋ねたまま、支那人の前に足を止めた。そうして彼等はだかすがたの裸姿へ、じつと鋭い眼を注いだ。後のちにある亞米利加人アメリカが、この有名な將軍の眼には、Monomania じみた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。——そのモノメニアツクな眼の色が、

殊にこう云う場合には、気味の悪い輝きを加えるのだった。

旅団参謀は將軍に、ざつと事件の顛末てんまつを話した。が、將軍は思い出したように、時々うなず頷いて見せるばかりだった。

「この上はもうぶん擲なぐつてでも、白状させるほかはないのですが、——」

参謀がこう云いかけた時、將軍は地図ちずを持った手に、床ゆかの上にある支那靴ゆびさを指した。

「あの靴こわを壊して見給え。」

靴は見る見る底をまくられた。するとそこに縫いこまれた、四五枚の地図と秘密書類が、たちまちばらばらと床の上に落ちた。

二人の支那人はそれを見ると、さすがに顔の色を失ってしまった。

が、やはり押し黙ったまま、剛情ごうじように敷瓦を見つめていた。

「そんな事だろうと思つていた。」

將軍は旅団長を顧みながら、得意そうに微笑を洩もらした。

「しかし靴とはまた考えたものですね。——おい、もうその連れんじ中ゆうには着物を着せてやれ。——こんな間牒かんちようは始めてです。」

「軍司令官閣下の炯眼けいがんには驚きました。」

旅団副官は旅団長へ、間牒の証拠品を渡しながら、愛嬌あいきようの
好い笑顔を見せた。——あたかも靴に目をつけたのは、將軍より
も彼自身が、先だった事も忘れたように。

「だが裸にしてもないとすれば、靴よりほかに隠せないじゃないか？」

將軍はまだ上機嫌だった。

「わしはすぐに靴と睨にらんだ。」

「どうもこの辺の住民はいけません。我々がここへ来た時も、日の丸の旗を出したのですが、その癖家の中を検しらべて見れば、大抵露西亞ロシアの旗を持っているのです。」

旅団長も何か浮き浮きしていた。

「つまり奸佞かんねい邪智じやちなのじゃね。」

「そうです。煮ても焼いても食えないのです。」

こんな会話が続いている内、旅団参謀はまだ通訳と、二人の支那人を検べていた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の悪い顔を向けると、吐はき出すようにこう命じた。

「おい歩兵！ この間牒はお前が掴つかまえて来たのだから、次手ついでにお前が殺して来い。」

二十分のちの後、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮べんぱつ髪を結ばれたまま、枯かれ柳やなぎの根がたに坐まっていた。

田口一等卒は銃剣をつけると、まず辮髪を解き放した。それから銃を構えたまま、年下の男うしろの後に立った。が、彼等かれらを突殺す前に、殺すと云う事だけは告げたいと思つた。

「爾ニイ、——」

彼はそう云つて見たが、「殺す」と云う支那語を知らなかつた。

「爾ニイ、殺すぞ！」

二人の支那人は云い合せたように、じろりと彼を振り返つた。

しかし驚いたけはいも見せず、それぎり別々の方角へ、何度も叩頭うとうを続け出した。「故郷へ別れを告げているのだ。」——田口一等卒は身構えながら、こうその叩頭を解釈した。

叩頭が一通り済んでしまうと、彼等は覚悟をきめたように、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃剣が突き刺せなかつた。

「ニイ爾、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨またがつた騎兵が一人、蹄ひづめに砂すなほこり埃ほこりを巻き揚げて来た。

「歩兵！」

騎兵は——近づいたのを見れば曹そうちよう長ちやうだった。それが二人の

支那人を見ると、馬の歩みを緩めながら、傲然と彼に声をかけた。

「露探か？ 露探だろう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑した。

「何、二人とも上げます。」

「そうか？ それは気前が好いな。」

騎兵は身軽に馬を下りた。そうして支那人の後にまわると、腰の日本刀を抜き放した。その時また村の方から、勇しい馬蹄の響と共に、三人の将校が近づいて来た。騎兵はそれに頓着せず、まっ向に刀を振り上げた。が、まだその刀を下さない内に、三人の将校は悠々と、彼等の側へ通りかかった。軍司令官！ 騎兵は

田口一等卒と一しよに、馬上の將軍を見上げながら、正しい挙手の礼をした。

「露探ろたんだな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！ 斬れ！」

騎兵は言下ごんかに刀をかざすと、一打ひとつうちに若い支那人を斬きった。支

那人の頭は躍るように、枯柳の根もとに転ころげ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑はんでん点を拵はげ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快そうに頷うなずきながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染そんだ刀を提とうげたまま、もう一人

の支那人の後に立った。その態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ氣色があつた。「この×××らばおれにも殺せる。」——田口一等卒はそう思いながら、枯柳の根もとに腰を下した。騎兵はまた刀を振り上げた。が、髯のある支那人は、黙然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。……

將軍に従つた軍參謀の一人、——穗積中佐は鞍の上に、春寒の曠野を眺めて行つた。が、遠い枯木立や、路ばたに倒れた石敢当も、中佐の眼には映らなかつた。それは彼の頭には、一時愛読したスタンダールの言葉が、絶えず漂つて来るからだつた。

「私は勲章に埋つた人間を見ると、あれだけの勲章を手に入

れるには、どのくらい××な事ばかりしたか、それが気になつて仕方がない。……」

——ふと気がつけば彼の馬は、ずっと將軍に遅れていた。中佐は軽い身震みふるいをすると、すぐに馬を急がせ出した。ちようど当り出した薄日の光に、飾緒かざりおの金きんをきらめかせながら。

三 陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡あきつぎゆうほうに駐とどまっていた、第×軍司令部では、午前しやうこんさいに招魂祭しやうこんさいを行のちつた後、余興よきようの演芸会のてんを催もよおす事ぎだいになつた。会場は支那の村落に多い、野天のてんの戲台ぎだいを応用

した、急拵きゆうごしらえの舞台の前に、天幕テントを張り渡したに過ぎなかつた。が、その蓆敷むしろじきの会場には、もう一時の定刻前ぜんに、大勢の兵卒が集っていた。この薄汚いカアキイ服に、銃剣を下げた兵卒の群むれは、ほとんど看客かんかくと呼ぶのさえも、皮肉な感じを起させるほど、みじめな看客に違いなかつた。が、それだけまた彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂っているのは、一層可憐かれんな気がするのだった。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部へいたんかんぶの将校たちは、外国の従軍武官たちと、その後の小高い土地に、ずらりと椅子いすを並べていた。そこには参謀肩章だの、副官の襷たすきだのが見えるだけでも、一般兵卒の看客席かんかくより、遥かに空気が花やかだった。殊に外国の従軍

武官は、愚物ぐぶつの名の高い一人できえも、この花やかさを扶たすけるためには、軍司令官以上の効果があつた。

將軍は今日も上機嫌じょうきげんだつた。何か副官の一人と話しながら、時々番付を開いて見ている、——その眼にも始終日光のように、人懐ひとなつこい微笑が浮んでいた。

その内に定刻の一時になつた。桜の花や日の出をとり合せた、手際の好いい幕うしろの後では、何度か鳴りの悪い拍子木ひょうしぎが響いた。と
思うとその幕は、余興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれ
て行つた。

舞台は日本の室内だつた。それが米屋の店だと云う事は、一隅
に積まれた米俵が、わずかに暗示を与えていた。そこへ前垂掛まえだれが

けの米屋の主人が、「お鍋なべや、お鍋や」と手を打ちながら、彼自身よりも背せの高い、銀杏いちようがえ返しの下女を呼び出して来た。それから、——筋は話すにも足りない、一場いちじょうの俄にわかが始まった。

舞台の悪ふざけが加わる度に、蓆むしろ敷じきの上の看客からは、何なん度も笑しょうせい声せいが立ち昇のぼった。いや、その後うしろの将校たちも、大部分たいていは笑わらいを浮うべていた。が、俄はその笑と競きそうように、ますます滑こっけ稽いを重ねて行いった。そうしてとうとうしまいには、越え中ちゆう禪ぜん一つひとつの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲すもうをとり始める所ところになつた。

笑声はさらに高たかまつた。兵站監部へいたんかんぶのある大尉だいていなどは、この滑稽こっけを迎えるため、ほとんど拍手ちゆうどさえしようとした。ちやうどその

途端だつた。突然烈しい叱咤しつたの声は、湧き返っている笑の上へ、鞭むちを加えるように響き渡つた。

「何だ、その醜態しゆうたいは？ 幕を引け！ 幕を！」

声の主は將軍だつた。將軍は太い軍刀のつかに、手袋の両手を重ねたまま、厳然と舞台を睨にらんで居た。

幕引きの少尉は命令通り、呆氣あつけにとられた役者たちの前へ、倉くら皇とさつきの幕を引いた。同時に蓆敷の看客も、かすかなどよめきの声のほかは、ひっそりと静まり返つてしまった。

外国の従軍武官たちと、一つ席にいた穂積中佐は、この沈黙を氣の毒に思つた。俄は勿論彼の顔には、微笑さえも浮ばせなかつた。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの余裕はあつた。

では外国武官たちに、裸はだかの相撲を見せても好いいか？——そう云う体面を重ずるには、何年か欧おうしゅう洲しゅうに留学した彼は、余りに外国人を知り過ぎていた。

「どうしたのですか？」

フランス

仏蘭西の将校は驚いたように、穂積中佐をふりかえった。

「將軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、——將軍は下品な事は嫌いなのです。」

そう云う内にもう一度、舞台の拍子木ひょうしぎが鳴り始めた。静まり

返つていた兵卒たちは、この音に元気を取り直したのか、そここ
こから拍手はくしゅを送り出した。穂積中佐もほっとしながら、彼の周

囲を眺め廻した。周囲にい並んだ将校たちは、いずれも幾分か気き兼かねそうに、舞台を見たり見なかつたりしている、——その中にたった一人、やはり軍刀へ手をのせたまま、ちようど幕の開あき出した舞台へ、じつと眼を注いでいた。

次の幕は前と反対に、人情がかった旧劇だった。舞台にはただ屏風びょうぶのほかにも、火のともった行燈あんどうが置いてあつた。そこに頬

骨こつの高い年増としまが一人、猪首いくびの町人と酒を飲んでいた。年増は時々かなきりこえ金切声かねきりこえに、「若旦那わかだんな」と相手の町人を呼んだ。そうして、—

—穂積中佐は舞台を見ずに、彼自身の記憶ひたに浸り出した。柳盛りゆうせい座いざの二階の手すりには、十二三の少年が倚よりかかっている。舞

台には桜の釣り枝がある。火影ほかげの多い町の書割かきわりがある。その中

に二銭にせんの団洲だんしゅうと呼ばれた、和光わこうの不破伴左衛門ふわばんざえもんが、編笠あみがさを片手みえに見得みえをしている。少年は舞台に見入ったまま、ほとんど息さえもつこうとしない。彼にもそんな時代があつた。……

「余興やめ！ 幕を引かんか？ 幕！ 幕！」

將軍の声は爆弾のように、中佐の追憶を打ち砕くだいた。中佐は舞台へ眼を返した。舞台にはすでに狼狽ろうばいした少尉が、幕と共に走っていた。その間あいだにちらりと屏風の上へ、男女の帯の懸かっているのが見えた。

中佐は思わず苦笑くしやうした。「余興掛きも気が利きかなすぎる。男女の相撲さえ禁じている將軍が、濡れ場ぬればを黙もくつて見ている筈はずがない。」——そんな事を考えながら、叱しっせい声の起つた席を見ると、將

軍はまだ不機嫌そうに、余興掛のいっとうしゅけい一等主計と、何か問答を重ねていた。

その時ふと中佐の耳は、口の悪いアメリカ亜米利加の武官が、隣に坐つたフランス仏蘭西の武官へ、こう話しかける声を捉とらえた。

「將軍らくNも楽じゃやない。軍司令官兼けんえつかん検閲官だから、——」
 やつと三幕目みまくめが始まったのは、それから十分の後のちだった。今度は木がはいっても、兵卒たちは拍手を送らなかつた。

「可かわい哀あそうに。監視かんしされながら、芝居を見ているようだ。」——
 穂積中佐は憐むように、ほとんど大きな話声も立てない、カアキイ服むれの群を見渡した。

三幕目の舞台は黒幕の前に、柳の木が二三本立ててあつた。そ

れはどこから伐^きつて来たか、生^{なま}々^{なま}しい實際の葉柳だった。そこに警部らしい髯^{ひげ}だらけの男が、年の若い巡査をいじめていた。穂^ほ積^{づみ}中佐は番附の上へ、不審そうに眼を落した。すると番附には「ピストル強^ぶ盗^{ごう}清水定吉、大川端^{おおかわ}捕^と物の場^ば」と書いてあった。

年の若い巡査は警部が去ると、大^{おお}仰^ぎに天を仰ぎながら、長^{なが}々^がと浩^{こう}歎^{たん}の独^{どく}白^{はく}を述べた。何でもその意味は長い間^{あいだ}、ピストル強盗をつけ廻しているが、速^{たい}捕^ほ出来ないとか云うのだった。それから人影でも認めめたのか、彼は相手に見つからないため、一まず大川の水の中へ姿を隠そうと決心した。そうして後^{うしろ}の黒幕の外へ、頭からさきに這^はいこんでしまった。その恰^{かつ}好^{こう}は鼻^ひ眞^ま眼^めに

見ても、大川の水へ没するよりは、蚊帳へはいるのに適當していた。

空虚の舞台にはしばらくの間、波の音を思わせるらしい、大太鼓の音がするだけだった。と、たちまち一方から、盲人が一人歩いて来た。盲人は杖をつき立てながら、そのまま向うへはいるうとする、——その途端に黒幕の外から、さっきの巡査が飛び出して来た。「ピストル強盗、清水定吉、御用だ!」——彼はそう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかった。盲人は咄嗟に身構えをした。と思うと眼がぱつちりあいた。「慄むらくは眼が小さ過ぎる。」——中佐は微笑を浮べながら、内心大人気ない批評を下した。

舞台では立ち廻りが始まっていた。ピストル強盜は渾名通り、ちやんとピストルを用意していた。二発、三発、——ピストルは続けさまに火を吐いた。しかし巡査は勇敢に、とうとう偽目くらに繩なわをかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり声一つかからなかつた。

中佐は將軍へ眼をやつた。將軍は今度も熱心に、じつと舞台を眺めていた。しかしその顔は以前よりも、遙かに柔やさしみを湛たえていた。

そこへ舞台には一方から、署長とその部下とが駈かけつけて来た。が、偽目くらと格闘中、ピストルの弾丸たまに中あたつた巡査は、もう昏こんこん々と倒れていた。署長はすぐに活かつを入れた。その間あいだに部下はい

ち早く、ピストル強盜の縄尻なわじりを捉えたとら。その後は署長と巡査との、旧劇めいた愁歎場しゆうたんばになった。署長は昔の名奉行めいぶぎようのように、何か云い遺す事のこはないかと云う。巡査は故郷に母がある、と云う。署長はまた母の事は心配するな。何かそのほかにも末期まつごの際に、心遣りはないかと云う。巡査は何も云う事はない、ピストル強盜を捉えたのは、この上もない満足だと云う。

——その時ひっそりした場内に、三度將軍さんどの声が響いた。が、今度は叱しっせい声の代りに、深い感激の嘆声だった。

「偉い奴じゃ。それでこそ日本男児にっぽんだんじじゃ。」

穂積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に焼けた將軍の頬ほおには、涙の痕あとが光っていた。「將軍は善人だ。」——

—中佐は軽い侮蔑ぶべつの中に、明るい好意をも感じ出した。

その時幕は悠々と、盛んな喝采かつさいを浴びながら、舞台の前に引かれて行った。穂積ほづみ中佐はその機会に、ひとり椅子いすから立ち上ると、会場の外へ歩み去った。

三十分の後のち、中佐は紙巻を啣くわえながら、やはり同参謀の中村なかむら少佐と、村はずれの空地あきちを歩いていた。

「第×師団の余興は大成功だね。N閣下は非常に喜んでいられた。」

中村少佐はこう云う間も、カイゼル髭ひげの端はしをひねっていた。

「第×師団の余興？ ああ、あのピストル強盗か？」

「ピストル強盗ばかりじゃない。閣下はあれから余興掛を呼んで、

もう一幕臨時にやれと云われた。今度は赤垣源蔵あかがきげんぞうだつたがね。何と云うのかな、あれは？ 徳利とくりの別れか？」

穂積中佐は微笑した眼に、広い野原を眺めまわした。もう高こうり梁ようの青んだ土には、かすかに陽炎かげろうが動いていた。

「それもまた大成功さ。——」

中村少佐は話し続けた。

「閣下は今夜も七時から、第×師団の余興掛よせに、寄席よせ的な事をやらせるそうだけ。」

「寄席らくし的？ 落語らくごでもやらせるのかね？」

「何、講談こうたんだそうだ。水戸黄門みとこうもん諸国めぐり——」

穂積中佐は苦笑くしやうした。が、相手は無頓着に、元気のよい口調

を続けて行つた。

「閣下は水戸黄門が好きなのだそうだ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正かとうきよまさとに、最も敬意を払っている。——そんな事を云つていられた。」

穂積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間に、細い雲母雲きらくもが吹かれていた。中佐はほつと息を吐はいた。

「春だね、いくら満洲まんしゅうでも。」

「内地はもう裕あわせを着ているだろう。」

中村少佐は東京を思った。料理の上手な細君を思った。小学校へ行っている子供を思った。そうして——かすかに憂鬱ゆううつになつた。

「向うあんずに杏あんずが咲さいている。」

穂積中佐は嬉しそうに、遠い土塀むらがに簇むらつた、赤い花の塊かたまりりを指した。Ecoute-moi, Madeline……—中佐の心にはいつのまにか、ユウゴオの歌が浮うんでいた。

四 父と子と

大正七年十月のある夜、中なか村むら少将、——当時の軍参謀中村少佐は、西洋風の応接室に、火のついたハヴァナをくわ啣くわえながら、ぼんやり安楽椅子によりかかっていた。

二十年余りの閑かん日じつ月げつは、少将を愛すべき老人らうじんにしていた。殊

に今夜は和服のせいか、禿はげ上あった額のあたりや、肉のたるんだ口のまわりには、一層好人物じみた気色けしきがあつた。少将は椅子いすの背せにもたれたまま、ゆっくり周囲を眺め廻した。それから、——急にため息を洩らした。

室の壁にはどこを見ても、西洋の画えの複製らしい、写真版がくの額が懸かけてあつた。そのある物は窓に倚よつた、寂しい少女しょうぞの肖像しょうぞうだつた。またある物は糸杉あいだの間に、太陽の見える風景だつた。

それらは皆電燈の光に、この古めかしい応接室へ、何か妙に薄ら寒い、嚴げん肅しゆくな空気を与えていた。が、その空気はどう云わう訣けか、少将には愉快でないらしかつた。

無言むごんの何分かが過ぎ去つた後のち、突然少将は室外に、かすかなノ

ツクの音を聞いた。

「おはいり。」

その声と同時に室の中へは、大学の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少将の前に立つと、そこにあった椅子に手をやりながら、ぶつきらぼうにこう云った。

「何か御用ですか？ お父さん。」

「うん。まあ、そこにおかけ。」

青年は素直すなおに腰おろを下した。

「何です？」

少将は返事をするために、青年の胸の金きん鈕ボタンへ、不審ふしんらしい眼をやった。

「今日きょうは？」

「今日は河合かわいの——お父さんは御存知ないでしょう。——僕と同じ文科の学生です。河合の追悼ついでうかい会があつたものですから、今帰つたばかりなのです。」

少将はちよいと頷うなずいた後のち、濃いハヴアナの煙を吐いた。それからやつと大儀たいぎそうに、肝腎かんじんの用向きを話し始めた。

「この壁にある画えだね、これはお前が懸け換えたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでした、今朝けさ僕が懸け換えたのです。いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思う。」

「この中へですか？」

青年は思わず微笑した。

「この中へ懸けてはいけなにかね？」

「いけないと云う事ありませんが、——しかしそれは可笑しい
でしよう。」

「肖像画はあすこにもあるようじゃないか？」

少将は炉ろの上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳
かのレムブランドが、悠々と少将を見下していた。

「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」

「そうか？　じゃ仕方がない。」

少将は容易に断念した。が、また葉巻の煙を吐きながら、静か

にこう話を続けた。

「お前は、——と云うよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思っているね？」

「別にどうも思つてはいません。まあ、偉い軍人でしょう。」
青年は老いた父の眼に、ばんしやく 晩酌のよい 酔を感じていた。

「それは偉い軍人だがね、閣下はまた実にちようじゃ 長者らしい、ひとな 人な 懐つこい性格も持つていられた。……」

少将はほとんど、感傷的に、將軍の逸話いつわを話し出した。それは日露戦役後、少将が那須野なすのの別荘に、將軍を訪れた時の事だった。その日別荘へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになつた、——そう云う別荘番の話だった。少将は案内を

知っていたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行つた所に、綿服を纏つた將軍が、夫人と一しよに佇んでいた。少將はこの老夫妻と、しばらくの間立ち話をした。が、將軍はいつまでたつても、そこを立ち去ろうとしなかつた。「何かここにも用でもおありですか？」——こう少將が尋ねると、將軍は急に笑い出した。「実はね、今妻が憚りへ行きたいと云うものだから、わしたちについて来た学生たちが、場所を探しに行つてくれた所じゃ。」ちようど今頃、——もう路ばたに毬栗などが、転がっている時分だつた。

少將は眼を細くしたまま、嬉しそうに独り微笑した。——そこへ色づいた林の中から、勢の好い中学生が、四五人同時に飛び出

して来た。彼等は少将に頓とんちやく着せず、將軍夫妻をとり囲かこむと、口々に彼等が夫人のために、見つけて来た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に来て貰うように、無邪気な競争さえ始めるのだった。「じゃあなた方に籤くじを引いて貰おう。」——將軍はこう云つてから、もう一度少将に笑顔えがおを見せた。……

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」

青年も笑わずにはいられなかつた。

「まあそんな調子でね、十二三の中学生でも、N閣下と云いさえすれば、叔父おじさんのように懐なついていたものだ。閣下はお前がたの思うように、決して一介の武弁ぶべんじゃない。」

少将は楽しそうに話し終ると、また炉の上のレムブラントを眺

めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い画描きです。」

「N閣下などとはどうだろう？」

青年の顔には当惑の色が浮んだ。

「どうと云つても困りますが、——まあN將軍などよりも、僕等に近い気もちのある人です。」

「閣下のお前がたに遠いと云うのは？」

「何と云えば好いですか？——まあ、こんな点ですね、たとえば今日追悼会ついとうかいのあつた、河合かわいと云う男などは、やはり自殺しているのです。が、自殺する前に——」

青年は真面目まじめに父の顔を見た。

「写真をとる余裕よゆうはなかつたようです。」

今度は機嫌いいの好い少将の眼に、ちらりと当惑の色が浮んだ。

「写真をとつても好いいいじゃないか？ 最後の記念と云う意味もあるし、——」

「誰のためにですか？」

「誰と云う事もないが、——我々始めN閣下の最後の顔は見たいじゃないか？」

「それは少くともN將軍は、考うべき事ではないと思うのです。僕は將軍の自殺した気もちは、幾分かわかるような気がします。しかし写真をとつたのはわかりません。まさか死後その写真が、

どこの店頭にも飾かざられる事を、——」

少将はほとんど、憤ふんぜん然と、青年の言葉を遮さへぎった。

「それは酷こくだ。閣下はそんな俗人じゃない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は不あいか相わらず変、顔かお色いろも声も落着いていた。

「無論俗人じゃなかったでしょう。至誠の人だった事も想像出来
ます。ただその至誠が僕等には、どうもはっきりのみこめないの
です。僕等より後のちの人間には、なおさら通じるとは思われません。

……」

父と子とはしばらくの間あいだ、気まづい沈黙を続けていた。

「時代の違いだね。」

少将はやつとつけ加えた。

「ええ、まあ、——」

青年はこう云いかけたなり、ちよいと窓の外のけはいに、耳を傾けるような眼つきになった。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少将は足を伸ばしたまま、嬉しそうに話頭を転換した。

「またマルメロ榎エノが落ちなければいいが、……」

(大正十年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

将軍

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>